

第36回日本リウマチリハビリテーション研究会学術集会

大阪医科薬科大学リハビリテーション医学教室 佐浦隆一

本学術集会（大会長 大阪医科薬科大学リハビリテーション医学教室 佐浦隆一）は「リウマチのリハビリテーション治療の再起動」をテーマに、第35回（2020年）以来5年ぶりに2025年2月16日、関西医科大学牧野キャンパス現地と研究会後のオンデマンド配信を組み合わせたハイブリッド様式にて開催されました。

本学術集会も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2021年以降開催が延び延びになっていましたが、蓬萊谷耕士事務局長（関西医科大学リハビリテーション学部作業療学科）を筆頭に全国の関節リウマチのリハビリテーション医療に関わる精鋭が一致団結して、創立の趣旨である「療法師の、療法師による、療法師のための研究会」の原点に立ち返り、全参加者数は70名弱の小規模ながら、しかし、実りのある学術集会を開催することができました。当日は「薬物治療で落ち着いているリウマチ患者さんが最期まで安寧に地域で生きるためには？」を実現するためのプログラムが満載でした。

日本の超高齢社会に向けた「2040年地域医療構想」を踏まえ、「生活期の効果的で持続可能な支援の標準

実行委員
と講師の
先生方



化に向けた取り組み」の題名で広島大学病院の三上幸夫教授に講演していただきました。また、松本歯科大学の宇田川信之教授には「骨はダイナミックに躍動している—関節リウマチにおける骨破壊に関与する破骨細胞とは？—」と題して、基礎医学には少し縁遠いリハビリテーション関連専門職にもわかるように骨破壊のメカニズムを解説していただきました。

第37回研究会は2026年2月に「リウマチリハビリテーション医療のDX（仮題）」をテーマに京都市で開催予定です。療法師主体の研究会ですが、ぜひ、リハビリテーション科医をはじめとした多くの医療職・介護/福祉職の皆様のご参加をお待ちしています。

第69回日本リウマチ学会総会・学術集会

神戸大学大学院医学研究科リハビリテーション機能回復学 酒井良忠

2025年4月24日から26日にかけて福岡市で開催された第69回日本リウマチ学会総会・学術集会に参加いたしました。免疫疾患に関する治療薬は関節リウマチ（RA）のみならず、乾癬、全身性エリテマトーデス、強皮症、成人発症Still病などさまざまな疾患、標的分子をターゲットに開発が進んでおり、製薬会社のブースも多く非常に盛況でありました。リハビリテーション診療にかかわるセッションは教育講演、ポスターセッション、口演セッションが1つずつ企画されており、リウマチ性疾患におけるリハビリテーション診療の研究発表も活発に行われていました。3Dプリンターを用いた自助具や装具の開発の発表やオンライン音楽療法の効果など、最近の技術を用いたりハビリテーション医療の研究も非常に興味深く拝聴しました。また、薬物治療の進歩によりリハビリテーション診療の機会が減少していることから、若いリハビリテーションセラピストがRA患者に触れる機会が減少

学会の立て看板



RAのリハビリテーション医療の課題に関する研究（道後温泉病院：島原範芳先生ご発表、発表者に掲載許可をいただいております）

し、世代間格差やリハビリテーション治療手技の継承、RAに対するチーム医療の崩壊について警鐘を鳴らす発表が強く印象に残りました。RA患者のリハビリテーション診療の充実と進歩のための施策の必要性が強く認識された学術集会でした。